

グレゲリーア抄

著者	ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ, 平田 渡
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	37
ページ	1-37
発行年	2004-04-01
その他のタイトル	A Japanese Translation of Selected 'Greguerias' by Ramon Gomez de la Serna
URL	http://hdl.handle.net/10112/12578

グレゲリーア抄

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ 作

平田 渡 編訳

訳者まえがき

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（一八八八—一九六三）の本邦への紹介者、堀口大學（一八九二—一九八二）

上田敏の『海潮音』、永井荷風の『珊瑚集』と並ぶ、明治以降の三大訳詩集に数えられる『月下の一群』を遺した、詩人で翻訳家の堀口大學は、専門のフランス文学以外では、スペイン文学につよい関心をもちつづけていた。それは、フランス文学の中でも、メリメの『カルメン』とモンテランの『闘牛士』という、とりわけスペイン色の濃い作品の翻訳を手がけていることにもあらわれている。セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』（前篇）の訳業は、そうした堀口大學のスペイン文学にたいする思い入れの集大成といえるかもしれない。

そもそも堀口大學がスペイン文学に興味を抱いたと思われるの

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ作 グレゲリーア抄

は、外交官だった父九萬一くまいちが、まず革命が起きてまもないメキシコに、ついで第一次世界大戦中のスペインに赴任したとき、それぞれの国を訪れて滞在した時代までさかのぼる。メキシコシティでは、革命の風雲児フランシスコ・マデーロはポルフィリオ・ディアスの独裁政を倒したあと、大統領に就任したが、やがて動乱の嵐にまきこまれ、九萬一がその一族を公使館にかくまうという事態がしゅつたい出来た。けれども大學は、家庭教師をつけてもらい、もっぱらフランス語の勉強にはげんだ。父がベルギー人の後妻をむかえていたせいで、フランス語を話す必要にせまられたのである。ほどなくフランス文学の小説や詩を読み、訳詩をはじめた。

一方、マドリードでは、たまたまスペイン人画家の紹介で亡命中のマリー・ローランサン（のちに『動物小詩集』、『ロオランサン詩画集』を紹介した）に会い、絵の手ほどきをうけるとともに、かつての婚約者だったアポリネール（やがて『動物詩集』、巻末にゴメス・デ・ラ・セル

ナによる「アポリネエル小伝」が付された『アポリネエル詩抄』、『アポリネエル詩集』、『アポリネール遺稿詩篇』を翻訳した」という詩人の存在を教えられた。

大學は、メキシコシティーやマドリッドというスペイン語圏に身をおきながら、心はあくまでフランス文学にひたっていたとおぼしい。それゆえに、スペイン文学への関心といっても、フランス文学を通じたものならざるをえなかったのである。

大學が、ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（以下、スペインでの通称に従いラモンと略す）という作家の存在を知ったのは、おそらく第一次世界大戦に出兵し非業の死を遂げたアポリネールの遺稿詩集『そこに在る』（一九二五）をひもといたときではないだろうか。そこには、「われこそはスペインのアポリネールなるぞと言わんばかりの意気ごみで、三十余頁にわたる長文の序を寄せていた」（『乳房新抄』）のである。その頃、フランス詩の「黄金のアポロ」と呼ばれたアポリネールに惚れこんでいた大學は、さっそくラモンについて調べたにちがいない。すると、ヴァレリー・ラルボーやジャン・カスー、さらにはマルセル・オークレールの手によって『グレゲリーア』（一九二七）、『サーカス』（同）、『乳房』（同）といった作品がすでにフランスに紹介されている、自分と同世代の異能の作家だとわかった。本人が「フランス近代詩の好箇の見本帖」だという、訳詩集『月下の一群』を世に問うたころの話である。

それから、大學がラモンの『乳房』を、『乳房雑考』（一九六九）と

『乳房抄』（七〇）、さらには『乳房新抄』（八〇）と三回に分けて日本に紹介するまでに、永い時間が流れた。そのひまに、ラモンのひそみに倣ったのかどうかはわからないが、『乳房』（四七）と題する訳詩集を出している。しかし、これはエロティックなものという点では共通しているけれど、既刊の『ヴェニユス生誕』ほかの自分の詩集からエロティックなものを集成したものだだった。

ともかくも、ラモンの『乳房』は、大學が永年、胸にあたためていた作品だったことはまちがいない。『乳房雑考』、『乳房抄』、『乳房新抄』のうち、最後の『乳房新抄』は、一九七九年の文化勲章受章を記念して出してもらったものである。このことから、大學が哀惜してやまなかった作品だったことがわかる。

『乳房新抄』の「あとがき」には、ラモンほどの「文学的才能に恵まれた作家は、古今のスペインを通じて類を見ない」としたためている。

ラモンに着目したいきざつ

筑摩書房版の『ドン・キホーテ』の訳者として知られる会田由氏が、『南欧の文学』（明治書院）に書かれたスペイン文学史や、そのあとに出たホセ・ガルシア・ロペスの『スペイン文学史』（東谷頼人訳白水社）を学生時代にひもといたときは、ラモンのことはほとんど印象に残らなかったから、ラモンに関心を抱きはじめたのは、堀口大學の『乳房雑考』、『乳房抄』、『乳房新抄』の翻訳を手にしたとき

だったにちがいない。

古典作品の一部をべつにすると、スペイン文学はエロティシズムとは無縁だと思っていたところに、まるごと一冊、乳房に関する短篇で埋めつくした本が紹介されたのである。限定版で出たので、知るひとぞ知る本となった点も、興味をかきたてる方向にはたらいだ。

読んでみると、二十九歳のラモンが書いたとは思えない、じつに瀟洒な作品であった。スペインの夏空のように、からりと晴れあがった雰囲気も好ましく思われた。

ラモンは「まえがき」でつぎのように述べている。

「この書は決して春本ではない。この書の中に猥褻は影さえとどめない。在るのは一種の清浄無垢だけ、感知可能の清浄無垢、人生の園生に垣間見る無数の乳房が演出する光景へのなごやかでそしてほほえましい観入だけだ」

わざわざ、こう断わらなければならなかったところに、当時のスペイン文壇がおかれていた窮屈な情況が読みとれよう。なにしろ、スペインは十九世紀初葉まで異端審問制度が存続し、カトリック教会の監視の目が光っていたお国柄である。すでに二十世紀に入っていたとはいえ、自由な芸術活動をするには一大決心が必要だった。その点、ラモンが頻繁に訪れたベル・エポック期のパリとは雲泥の差があった。

ラモンが『乳房』に付した「まえがき」は、おのれの作品を擁護

する狙いとともに、おのれの生き方に関する大胆な信条告白の性格をおびていて興味をそそられる。以下に、二十代の若者らしい、気つぷのいい発言を引いてみよう。

「自分の精神を、髪ふり乱した、むき出しのままの姿で、唐突にしかも悠々と、さらけ出したりする者は、僕以外には誰ひとりありはしないが、これこそは自由人の、完全に解放された自由人の、真に贅沢な行為であり、僕の一生を支配する主義でもあり、人間に与えられた最高の財宝だと僕が考えるものでもあるのだ」

さらに、ラモンは、旧態依然とした保守主義から抜けだせない連中をこう揶揄している。

「思想の自由となると蛇蝎の如くこれを忌み嫌うくせに、世にも恥ずべき行為を平気でしている世間の奴らが求めるのは、違法で醜悪で、光明からだまし取ったような暗黒でじめじめした肉感なのだ。ところが肉感に添加さるべきはむしろ光明なのだ。こうすることによって、不当に軽視されている肉感の比重を増し、政治の世界で宣伝されているいかなる主義主張より、より以上に革命的な自由主義の承認に役立たすべきなのだ」

表題だけでも読書界の響響ひんしんを買ってそんな作品を書いたうえに、ラモンは自由人であることを宣言し、スペインでないがしろにされている肉感 *sensualidad* というか、エロティシズムに光をあて、「政治の世界で宣伝されているいかなる主義主張より、より以上に革命的な自由主義の承認に役立たすべきなのだ」とうそぶいている。のち

に、それが若気の至りの放言でもなんでもなく、そのまま、ラモンの生き方そのものを語ったものだとを知り、驚かされた。それに、哲学者ウナムーノや小説家アソリンに代表される、いわゆる九八年代の作家とは異なり、政治の世界に首をつっこむこともなかったのである。

こうしてラモンに興味をおぼえ、文献を収集するうちに、『乳房』を出した一九一七年（刊行年はガラクシア・グーテンベルグ社+シルクロ・デ・レクトーレス版『全集』による。以下同じ）に『グレゲリーア』と『サーカス』という、それぞれラモンにしか書けない本を上梓していることがわかった。

『サーカス』は、幼い頃からサーカス大好き人間だったラモンが、サーカス担当記者を自認しながらイラスト入りで書きあげたサーカス本である。『乳房』といい、『サーカス』といい、自由人ラモンの遊びどころから生まれた点で共通している。

では、『グレゲリーア』の場合はどうだろうか。

グレゲリーアとは何か

スペインやラテンアメリカ諸国だけではなく、西欧においても、ラモンといえはまず、五十年になんなんとするあいだ書きつづけたグレゲリーアの作者として知られている。スペインで出版されたあと、評判になつていことをさきつけたヴァレリー・ラルボーは、さっそく原書を取りよせたが、「一読後、感服のあまり、まる一週

間、ほとんど仕事が手につかなかった」と述べている。

では、ここでいうグレゲリーア *Begueria* とは何なのだろう。それは、この「まえがき」につづく拙訳をお読みいただければ一目瞭然だが、ラモン独特の、詩的な散文による簡潔な表現形式の謂にはかならない。当時のヨーロッパに澎湃としておこった前衛芸術運動の影響をうけ、旧弊な文学の改革をめざしたラモン自身は、『諧謔+隠喩だ』と定義している。考えてみると、この定義自体がすでにグレゲリーアの体裁をそなえていると言つていい。このように、グレゲリーアの定義をグレゲリーアでやつてのけるところに、ラモンの遊びどころの真骨頂が存するのである。

また、アメリカ在住のスペイン文学者、ロドルフォ・カルドーナによれば、「グレゲリーアとは諧謔のひねりをきかせた詩的表現」だし、スペイン内戦が勃発したあとアメリカに亡命し、メリーランド州のジョンズ・ホプキンス大学でスペイン文学の教鞭をとつた詩人、ペドロ・サリーナスに言わせると、「わたしどもをとり囲む現実を詩的にとらえようとする新しい形式だ」ということになる。

カルドーナにしろ、サリーナスにしろ、グレゲリーアが詩の領域に属すると指摘している点に注目したい。ラモン本人も、「散文による俳諧」に似ていると見なしていたからである。俳諧の真髓が、連句をまくときの遊びどころから生まれる軽みにあるとすれば、まさにラモンの見立てどおりにちがいない。何ものにも束縛されない、自由でのびやかな、ラモンの精神からつむぎだされたグレゲリーア

は、何よりも軽妙洒脱さを特徴としているのである。

ところで、ラモンの『グレゲリーア』は、「蛇／長すぎる」という一篇が人口に膾炙したジュール・ルナルルの『博物誌』（一八九六）との類似がよくとり沙汰されるが、とりあげている対象を見ただけでも、大きな違いがあることがわかる。たとえば、一九三六年（昭和十）に出た岸田國士の手になる本邦初訳の『博物誌』によれば、博物誌とはいいながら、あつかわれてるのはほとんど動物ばかりで、いっそ動物誌と呼んだほうがびつたりするくらいである。

『グレゲリーア』においても、たしかに動物は少なからぬ比重を占めているのだが、『博物誌』ほどではない。いちばん目立つのは静物をとりあげたものである。

ラモンは、『グレゲリーア』を発表する三年前、『蚤ウツクシの市』（二九一四）という作品を上梓している。これは、マドリードの蚤ウツクシの市で売られる古物やがらくたにたいする、ラモンの尋常一様ではないこだわりを示すものである。のちにヴァレリー・ラルボーをして、「もし静物愛護協会というものがあつたら、ラモンはいのいちばんに会員になったであろう」と言わしめたのは、この作品にほかならない。静物はラモンを惹きつけてやまなかつたものであり、ラモンがよなくいとおしんだ世界だった。

マドリードのサラマンカ地区、ヴェラスケス街の塔のある邸といえ、ラモンがめざましい活躍をみせた二十年代に暮らした場所だが、書斎には、お気に入りの静物が足の踏み場もないほど並んでい

たといわれている。壁を埋めつくした絵画や複製画、写真、ポスターはまだしも、蚤ウツクシの市で見つけた掘り出しもの、陶器、ガラス玉、機械じかけのおもちゃ、旅行みやげ、祝祭日用の提灯、貝殻、救命具、長さが四メートルの机のそばにおかれた、ソファに坐った原寸大の女の蠟人形とあげてくると、ただの雑然とした書斎でないことはあきらかだろう。

『グレゲリーア』において、静物をとりあげた作品が目をはひくのは、ラモンの日常生活における静物への愛着のあらわれなのである。ラモンはこれまで詩人が見向きもしなかつた事物やこまごまとしたものに目をとめ、グレゲリーアというかたちにして救いあげたのである。その結果、詩の領域が拡大することになった。『グレゲリーア』以降、スペイン詩において隠喩のもつ重要性が見直されたことと同様、これもラモンの功績として見逃がすわけにはゆかない。

ラモン主義の誕生

ラモンは、新しい文学は新しい詩から生まれなければならないという考えを抱いていた。そこで、科学的、論理的思考を疑っていたラモンは、グレゲリーアに見るように、視覚と聴覚に依拠しながら、永いあいだ定着していた文学上の規則を壊すことをはじめたのである。そのとき、ラモンの感覚をとき澄ましたのは、みずからも試みた風刺画カリカチュアにたいする興味だったといわれている。

ラモンがグレゲリーアという革新的なかたちを見出したのは、

『グレゲリーア』として一冊の本にまとめる五年前の話である。

一九〇八年、マドリード^{マドリード}文芸協会^{アテネオ}の文芸部門の会長をつとめていたラモンの父ドン・ハヴィエルは、息子の作品発表の場として「プロメテウス」*Prometeo*という文芸誌を創刊し、主宰者となった。以後、一九二二年までの四年間に三十八号を出し、ラモンを文壇に送り出す後押しをした。その「プロメテウス」の別冊として出たのが『タペストリー』(二九二二)というエッセイ集なのだが、その中に、掉尾を飾るかたちで十三篇のグレゲリーアがお目見えをしている。

したがって、ラモンがグレゲリーアをひねり出し、ラモン主義 *Ramonismo* という独自の境地をひらいたのは、一九二二年から一七年にかけてのことだと考えられる。『蚤の市』はいうまでもなく、『グレゲリーア』と同年に出た『サーカス』と『乳房』においても、はつきりとグレゲリーアの精神が息づいているからである。そこには、ヴァレリー・ラルボー風にいえば、マドリードのエスプリが脈打っている。これらの作品で生みだされた様式は、いずれも小説、詩、エッセイといった既成の文学のジャンルにふりわけられない、ラモンの独創によるものである。まさにラモン主義としかいいようのない、ほかの作家の追隨を許さない作風だといえるだろう。一九一七年頃から、スペイン内戦が起きてアルゼンチンに亡命する三六年までの、約二十年がラモンの全盛期にあたる。

それにしても、蚤の市やサーカスや乳房、あるいは夜明けについ

て、一冊の本をものすることができるような才能をそなえた作家がこれまでスペインに存在したのだろうか。ラモンが敬愛した作家アソリン、さらにはペドロ・サリーナスもいうように、ラモンは、ラモン・ペレス・デ・アヤラという作家や、哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセーにつづく世代をたったひとりで背負^しって立つた作家だったのである。

グレゲリーア選択の基準

現時点で知り得たかぎりのグレゲリーア本を挙げると、以下のとおりである。

- ① *Greguerías*. Editorial Prometeo. -Valencia, 1917.
- ② *Greguerías selectas*. Editorial Saturnino Calleja. -Madrid, 1919.
- ③ *Las 636 mejores greguerías*. Agencia Mundial de Librerías. -Paris, Madrid, Lisboa, 1927.
- ④ *Noisimas greguerías*. "Cuadernos de La Gaceta Literaria." -Madrid, 1929.
- ⑤ *Greguerías 1935*. Editorial Cruz y Raya. -Madrid, 1935.
- ⑥ *Flor de greguerías*. Espasa-Calpe. -Madrid, 1935.
- ⑦ *Greguerías*. Espasa-Calpe Argentina. -Buenos Aires, 1940.
- ⑧ *Greguerías completas*. Editorial Lauro. -Barcelona, 1947.
- ⑨ *Greguerías; selección 1940-1952*. Espasa-Calpe Argentina.

Buenos Aires, 1952

⑨ *Total de greguerías*. Editorial Aguilar. -Madrid, 1955.

⑩ *Flor de greguerías (1910-1958)*. Editorial Losada. -Buenos Aires, 1958.

⑪ *Greguerías litográficas*. Escuela de Artes y Oficios de Barcelona. -Barcelona, 1959.

⑫ *Greguerías: selección 1910-1960*. Espasa-Calpe.-Madrid, 1960.

ラモンは、小説、エッセイ、戯曲、自叙伝、あるいは欧米の作家や詩人、劇作家、画家、音楽家の肖像をとらえた伝記、それにラモン主義の作品を書く一方で、新聞や雑誌にグレゲリーアを発表しつづけた。この一覧表の⑬によれば、ほぼ半世紀にわたるライフワークだったことがわかる。

ほとんどの版がペーパーバックスの廉価本として出ている中で、⑩の『グレゲリーア全集』は、ラモンの文業の“金婚式”を記念した、革装幀の袖珍本であり、ひととき目をひく。三〇〇以上のラモン自筆の風刺画^{カリカチュア}が挿入されている。自序や作品や翻訳一覧を除くと、本文は約一九〇〇頁に及んでいるので、ここで一頁平均、七首のグレゲリーアが載っていると仮定すれば、総数は一三三、三〇〇篇という計算になる。これが、ラモンが書いたグレゲリーアの総数の目安と考えていいだろう。

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ作 グレゲリーア抄

以下につづく拙訳は、その中からわずか四三〇篇ほど選んだものにすぎない。選択にあたっては、名著の呼び声が高い『古川柳おちほひろい』(東京 講談社文庫 昭56・1・15)において、田辺聖子が述べている古川柳のわかりにくさと一脈通じるものがあり、はなはだ興味ぶかかった。その言葉を引く。

「古川柳というものは、もともと二つの意味でわかりにくいのだ。一つは、江戸時代の風俗人情、慣習に通じてないと、句意を察することができないもの。また、題材になっていない歴史的エピソードや、謡曲や口碑伝説などがもたになっていて、その方面の智識がないと、いくら読んでも、首をひねるばかりである。

(中略) 古川柳ばかりは、『読書百遍、意義おのずから通ず』などというところが、通らないのでこまるのである」

ラモンのグレゲリーアは、俳諧よりも古川柳に近いのではないかとひそかに考えているのだが、今回は面白さがつかめないものは割愛し、句意が通じてもどきが面白いかわからないものは棄てた。ただし前者の中で、メキシコ人で稀代の読書家であるオラシオ・ゴメス・ダンテス氏に訊いて氷解したものは、採りいれさせていただいた。

なお、拙訳は読者の読みやすさに資するのではないかと考えて、以下のようにテーマ別に分類されている。あくまで便宜的なものではないが、目次がわりにお使い願えればさいわいである。

人間	一〇
女	一一
男	一三
静物	一四
食べもの・飲みもの	二〇
乗りもの	二一
動物	二二
植物	二七
自然	二八
星辰・月	三〇
鉱物	三〇
音楽	三一
文学・アルファベット	三一
芸術	三一
夢	三三
政治・思想	三四
神話・歴史	三四
そのほか	三五

ここには、モチーフというか題材によって分類すれば、ラモンが何に関心を抱いていたか見えてくるかもしれないという訳者の勝手な思いつきもはたらいている。その点、ご諒恕を願いたい。ラモン

自身は、感興のおもむくままに、おのれの目で見、耳で聴いたことを、ひたすらグレゲリーアとして書きとめてゆくことしか頭になかった。分類したり、整理したりするござかしい作業をしていたら、万を超えるような膨大な量のグレゲリーアを遺すことはできなかったにちがいない。

主要参考文献

- * Rannón Gómez de la Serna : *Obras completas I 《Prometeo》 I. Escritos de juventud (1905-1913)* Galaxia Gutenberg + Circulo de Lectores. -Barcelona, 1996.
- * Rannón Gómez de la Serna : *Obras completas III Ramonismo I. El Rastro · El circo · Serenos.* Galaxia Gutenberg + Circulo de Lectores. -Barcelona, 1998.
- * Rannón Gómez de la Serna : *Obras completas IV Ramonismo II. Greguerías · Muestrario.* Galaxia Gutenberg + Circulo de Lectores. -Barcelona, 1997.
- * Rannón Gómez de la Serna: *Automoribundia.* Editorial Sudamericana. -Buenos Aires, 1948.
- * Rannón Gómez de la Serna : *Antología. Cincuenta años de literatura.* Selección y prólogo de Guillermo de Torre. Editorial Losada -Espasa Calpe Argentina -Editorial Poseidón -Emecé

- Editores -Editorial Sudamericana. -Buenos Aires, 1955.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Guía del Rastro*. Ilustraciones y plano de Eduardo Vicente. Fotografías de Carlos Saura. Taurus Ediciones. -Madrid, 1961.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Greguerías selectas*. Editorial Saturnino Calleja. -Madrid, 1919.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Las 636 mejores greguerías*. Agencia Mundial de Librerías. -París, Madrid, Lisboa, 1927.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Flor de greguerías (1910-1958)*. Editorial Losada. -Buenos Aires, 1958.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Total de greguerías. Segunda Edición*. Editorial Aguilar. -Madrid, 1961.
- * Rodolfo Cardona : *RAMON. A Study of Gómez de la Serna and His Works*. Eliseo Torres & Sons. -New York, 1957.
- * Ramón Gómez de la Serna : *Aphorisms*. Limited Edition. Selected and translated into English from the texts entitled *Greguerías*, with a critical introduction by Miguel González-Gerth. Latin American Literary Review Press. -Pittsburgh, Pennsylvania, 1989.

- *ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『乳房雑考』堀口大學訳 東京 プレス・ビブリオマーン 昭和44年7月(1969) (限定版375部)
- *ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『乳房抄』堀口大學訳 東京 プレス・ビブリオマーン 昭和45年3月(1970) (限定版355部 うち A版205部 B版150部)
- *ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ『乳房新抄』堀口大學訳 東京 プレス・ビブリオマーン 昭和55年1月(1980) (堀口大學文化勲章受章記念限定版206部 うち 自家用26部 一般頒布180部)
- *平田文也編『堀口大學書誌・年譜』東京 筑摩書房 1965年5月10日 (堀口大學喜寿記念)
- *ジユウル・ルナル『博物誌』岸田國士訳 東京 白水社 昭和14年7月(1939) (限定版1100部 非賣本若干部)

人間

恋愛とは、ふたりに刺繍をつくるようなもの

約束の時間を守るひと、自分があやまるのではなく、ひとにあやまらせていい気持ちになろうとし
生と死を結びつける溜め息がある

あわて者は命を落とす

老水夫、この世の見納めに海が見たい、鏡をもってきてくれとせがみ

死んでしまうことの難点Ⅱ骸骨すがたでは、ほかのひととけじめがつかないこと

月日がたつにつれ、われわれの心は^{つかずら}蔦葛におおわれてゆき、にっちもさっちもいかない

ひどい見栄っぱり墓の上に、家系樹が枝をひろげ

人間は子供の頃にはじめて物乞いをする、ひとに貯金箱をつきつけ、いくばくかのお金をせしめるのだ
差し出された手が凍えていても黙って握手をするのが^{たしな}嗜みというもの

子供の影、大人の影と同じくらい^ま生まじめに見え

もっとゆっくり物を忘れるべきだ、そうすれば、もっと永生きできる

目から輝きが失われてゆくとき、ひとはこの世を去る

浮浪者は名も知れず、自由気ままに暮らしている、おのれの名前を樹皮にきざむようなことがあれば、死が近い

啞者は、われわれが聾者であるかのように、聾者は、われわれが啞者であるかのように、話しかける

人間はパラシュートのように畳まれたおのれの影を背負っている

絞首刑にかけられた男の首の縄目模様、生涯、消えず

われわれがものを見ているのは頭でだろうか、目でだろうか

忘れてはならない、若者は高齢者とおなじ素材でできている

年をとるとは、二巻本の辞書を取り出したあと、何のためにそうしたかわからなくなる

こと
ふつうの恋Ⅱふたりのおばかさんが我慢しあうこと

あの三人というか三角関係、女が豊満なせいで四角関係になり

わたしどもは人生という厚手の生地ニに穴をうがち、裏側に何があるか見てみたいと思っているが、そうした謎を守る
番人がいて邪魔をする

わたしどもは伸びをするとき、人生という市電のつり革をつかもうとしている

あの亭主、妻、愛人の三人、白髪をおなじ色で染めるまでに、申し分のない三角関係に仕上げ

人生には三つの注意点がある、火傷をしないこと、けがをしないこと、夢からさめて現実に返らないことである
嘘つきを治せるのは聾者だけだ

ひとは口ほどには辛抱づよくない

署名をするときミドルネームをイニシャルで書く連中は、片方の目が見えていない

低俗な人間と大衆では大ちがい

本に注釈をつけたがるひとの手紙は追伸だらけ

人間が抱くねたみ、犬がわずらう狂犬病に相当し

たまに体重を測るひとはいるけれど、心の重さを測るひとはいない

幸せなとき時計は存在しない

女（彼女）

二人前のフルーツサラダを注文する女、原罪をゆるぎないものにし

彼女のウエスト、カーネーションのようにくびれて居ゐ

仮装をしたご婦人、コロツケのように食指を動かすが、一方でコロツケと同様、うさん臭し

「ストッキングに皺ができるのは困るけれど、長手袋ミトンは皺をつくるものなの」女とはそういうものらしい

脚のことが女の意識から離れることはない

美しい淑女がつけた香水は、自分のパパでないひとと遊びたがっている子供のように、われわれの上を飛び越えてゆく

少女がダンスをしたがるのは空を飛びたいから

ストッキングⅡ両脚の美しさをひきだすフィルター

彼女は冷たい夕食ばかりとったせいで心が冷えていった

忘れたいことがあつて香水をつける女

眠っている女の髪は夢の中の海にただようメドゥーサ「数匹の蛇がからみついた髪をしている」さながら

浴室のタオルかけに、うさぎの絵柄の、濡れた、彼女のストッキングがかかっているのは、ぞっとしない

女はこんなふうと言いくるめなければならぬ

「あたし金の靴がほしいの」

「それはすてきだけど、どこで履はくんだい。あんな重いもので階段を昇あったら、つまずいてけがをするのがおちさ」

彼女は花びらのようにひんやりとした頬をし

女性のストッキングが乗馬靴に替わることほど味気ないものはない

女の脚、美しいと意識していないと、ますます美しくなり

母親気どりで孫の手をひくおばあちゃんⅡおばあちゃんが科しなをつくる最後のチャンス

男（彼）

彼はあふれんばかりの喜びを表情にあらわした、窓ガラスについた雨つぶに陽が射したよう

コーヒーを飲むのを禁じられた彼は、骨董的な値うちのあるカップを買いはじめ

彼の文章は誤りだらけ、あげくのはて指紋まで間違え

彼はたった一本しかないネクタイを締めているが、ネクタイのセールスマンには変わらない

男は、ふいにマッチの火が消えたとき、どんな仕草をするかで人間がわかる

ご婦人が車のドアを開けられないと、男は陸上競技の選手のようにさっと駆けより、開けて見せる

あの気の弱い男は遠慮がちに呼び鈴を押した、おかげでどこに行ってもドアが開くことはなく、すごすごと立ち去ら

なければならなかった

あまりにも礼儀正しい彼は、樹木にむかってお辞儀をし

彼は米をたらふく食べたせいで中国語をおぼえた

彼はうっかり左足の上に左足を組んだので、右足を失くしてしまった

彼は、サイクリストを思わせるほどタイプを打つのが速い

静物

サンダル、足につける轡くつわ

市庁舎の時計、税金の支払い期限をきざみ

煙のかたち、火がくりひろげる手品

今では贗物のペルシア絨毯のほうが、本物よりペルシアらしくなっている、けだし、それが進歩というもの
壁にかかった絵、ゆがんでいるのは地震の前ぶれ

喪服、鳥のように女の美しさをついばみ

ストロベリー・アイスクリームがお似あいの日とピーチ・アイスクリームがぴったりの日がある、くれぐれもごつち
やになさいませんように

椅子、暗がりをいいことにご主人さまの足をすくおうとし

鏡の奥には写真家がしゃがみこんでいる

からっぽのクローク、透明人間の帽子が掛けてあり

時計、金属製の花

鍵はふざけて鍵でないふりをして見せ

取っ手つきの白い水差し、水をたたえた鳩

香水は花々の残り香

火花は悪魔のくさめ

だしぬけにひびく銃声、タイヤが自殺をはかり

飾り壺、永いあいだ継承されてきた一族の数寄がこめられ
病人がいちばん力を必要とするのは薬壘をあけるときのなり

夫婦げんかを聞いたメイド、とんでもないところに羽はたきを置き忘れ
窓ガラスのふるえⅡ家の悪寒

処方箋、薬局の主人をにやりとさせるため、医者がかかる通行許可証
揺り椅子が見る夏の夢、いちめんの銀世界を走る櫓と化し

偉大な数学者が散髪にゆくと、床屋は数字だらけ、お掃除がたいへん
枕、曲芸師のようにかかるやかに跳ねまわり

夏いちばんの問題、水着がちぢんだのか、この身が太ったのか
嘘みたいな話だが、エレヴェーター、昇るときよりも降りるときのほうが力を要し

米ドルはかわいい杖をついたSの字
思い出には額入りと額なしあり

遅れる時計は省エネ型の時計
ハンモックに寝ているあの男、網にかかった鮫

思い出、下着のようにちぢみ
電話、すでにめざめたひとの目覚まし時計

ガソリンは文明時代のお香
子供に地の霊みたいな服を着せないこと、森に行ってしまうかもしれないから

シャンペンの壘、あの契約書、この契約書が署名されるのを今か今かと待ちうけ

パンくずが落ちたベッド、夢はごつごつの岩や丘を駆けめぐり

風にあおられる紙、瀕死の小鳥かな

彼は煙草をやめ、また喫いはじめた、腹ぺこの灰皿に家じゅう追いまわされたあげく

落ちた鋏、拍車が鳴る音をひびかせ

扇風機のシーズン、去年の風をおおぎ出して始まり

家に持ち帰るとき難渋するのは鳥かご

水着とおなじ数の海水浴客が押しよせたら、浜辺は立錐の余地もなし

しびれを切らした子供、スプーンが太鼓のバチ代わりになることを見つけ

すべてのうわさ話は立ち消え、貝殻の中に葬られる

外国からの便りはうれしいけれど、切手収集家になりたくなるのには閉口させられ

現代生活Ⅱ燃えあがる抵抗運動の匂い

割れ鏡Ⅱ死んだ道化師

世間の皮膚があまりにも厚くなったせいで、もはや柔らかいトンカツは存在しない

釣り鐘状のガラスケースに入った時計Ⅱ壁龕の中の時間

夜したたり落ちる水、臍のような池と静けさをつくり出し

不眠症の泣きどころ、眠りこむのを待つうちに下顎がのび

冷たいベッドに入ると、自転車ペダルのように足をこいでしまった

鋏Ⅱ飼ひ慣らされたこうのとりはさみのくちばし

鐘には巨大な音のつばさが生えている

靴下をはいて靴のゆくえを探していると、水掻きのある鳥になったよう

傘を失くしたことを思い出させる種類の音楽

ぼくは憂鬱な気持ちで庭にある石のベンチをながめる、今日の午後にも、石のベンチが墓に変わらないともかぎらないから

レジの音、盗難防止ベルのようにはじけ

駅でスーツケースに坐ったひと、この世から追放された風情ふぜい

新しい日とともにまっさらな時間がやってくる

真昼、人間がもつともわがままになる時間

ほれぼれするのは、遠くで汽笛が聞こえるような欠伸あくび

レントゲン検査をうける者、最後の審判の目で身中を吟味され

子供に大法螺おほらをふきたければ、駱駝の乳をしぼるときは瘤こぶを押さえればいいんだよ、そう言えばいい

都会に涼味をもたらすのは、ばかになった水道の蛇口のほかなし

拍手は骨つきのあばら肉のようなもの、骨ばかりで食えた代物ではない

水族館の地下には泡の出るパイプを喫っている連中がいる

絹のハンカチ、愛撫とおさらばを意味し

二人がかりで運ぶテーブル、棺桶を運んだ心地

拡大鏡ルビをのぞくと馬の目で見ているよう

お金は浮浪者の匂い

夜の鐘、静かに鳴りたいのだろうが、それにしてはひびきすぎる

スキーヤー、やたらと長い半底（足の、土ふまずより前の部分。靴修理用）をつけている
底冷えた夜、かきこい靴下は暖炉のそばへゆき

家庭には団欒だんらんがあるのに、ひとは街に出かけてゆく、はめが外したいのさ
がらくたガラクタもはや玩具をもっていない者にとっての玩具

寝ている途中で目がさめると、ありのままの現実が見える、旅行者が一時停止をした汽車の窓からながめる景色に似ている

映画館の観客の中に、スクリーンでくりひろげられるドラマに身につまされる者

喉がかわいたひとに水をあげることは誰にもできるが、お金をあげることはそうそうできない

鏡が水銀のカーテンを開けてくれたら、わたしどものX線写真が見られる

浜辺では履いている靴が砂時計に変わる

風に飛ばされた帽子が疾走するわけがやっとわかった、うさぎの毛で作ってあるからだ

櫛くし、死んだ思想を並べた五線譜

「着古ですよ」という声を耳にし、目をやると、服を手放さなければならぬ哀れな手がのぞき

いちばん文明の進歩が見られるのは容器の分野

くず屋、日曜日には考古学者よろしくめかしこみ

煙は地獄に降りるべきとき天に昇り

最前列席で見る映画は航空ショーをながめるに似たり

日曜日、借り手のない空き家さびし、ひと気のなさがきわだち

道は昼より夜のほうが長いものだ

葉卷、灰燼かいじんに帰してゆく時間の指先

涙を流して死ぬのはひとり蠟燭ろうそくばかり

鐘が鳴るとき、天国と地獄が対話している

映画館、浴槽とおなじ早さで水抜きをすべし

アステリスクという言葉を目にはさむと、星のかけらの話を聞いているよう

骸骨の肋骨、小鳥に逃げられた、壊れた鳥籠

目覚まし時計、安っぽいブリキの時間というか、睡眠中のむなしい時間をきざみ

電話帳にはマエケナス〔ローマの政治家。ホラティウスやウエルギリウスの後援者〕に匹敵するようなパトロンの名前が出ているが、誰ひとり見つけられない

ドアは、しつぽを踏まれたような悲鳴をあげ

映画の中、あれよあれよという間に旅仕度がととのい

劇場のうしろ座席、まえ座席と話をしたが

すみれ色のネオン灯は、そこが近代的な通りであることを保証し、中心街で振りだされる小切手の裏書きをしてくれる

その日はあまりの上天気で、鍵たちはそろって散歩に出かけた

針穴を通してかなたにそびえる小さな山が見え

写真帳、失われた思いが葬られた墓場

墓碑銘は死神にあてた挑戦状

頭に折り紙で作りかけた大きな鳥をのせている尼僧たち

ほんものの鉛錘とは、しつぽをひっこ抜いた鼠ねずみの死骸のことなり

橋は川を文明化する

昔をしのばせる崩れかけた門は、外側は現在、内側は過去と向きあつて居

天金の本には、くつついて離れないページがある、あれらのページは金婚式のお祝いをしている

食べもの・飲みもの

レストランで出てくる火のついた洒落たデザートは消防士が作ってしかるべきもの

われわれが食べる二個の卵は、見た目は双子のようだが、じつは又従兄弟またいとこの子供ですらない

トマトには、顔を赤らめさせるビタミンが入っている

ジャガイモ、土の中でこぶしを握り

ガルバンソ（ひよこ）豆には鼻があり

蛤はまぐりは海のカスタネット

レタス、アンダースカートそのもの

手のひらに、ひとにぎりの米をのせたとたん、われわれは台所にいる宝石商に早変わり

ひと房のマスカットぶどう、のべつ画家を求め

食卓にクレソンが出ると、せせらぎが聞こえる小川の岸づたいの田舎道が見える

サンドイッチというやつ、ほんの申しわけ程度しかハムが入っておらず、偽善もいところ

干しぶどう、ぶどうの影を商品化し

大蒜、^{ばんじく}魔女の菌形をして居

うまくフライにされた魚、潮の香ひきたち

カフェオーレは白人と黒人の混血の飲みものなり

シャンパンは喜びのあぶくに満ち

西瓜は入り陽の貯金箱

人間が作ったもので神をにやりとさせるものは少ないが、酒はまれな例

果物はまわりの光景を見てきた生き証人、りんごはもぎとられた木や果樹園をおほえ

乗りもの

着陸したばかりの飛行機から降りてくる乗客は、得意げな様子を見せる、まるで神と話をしたあと、われわれへのメツ

セージを託されてきたかのよう

汽車が長いカーヴにさしかかると、先頭部分から最後尾までが見えてくる、旅行中、至福の気分にあひたれるのはそんなとき

ヘリコプター、空飛ぶコルクぬき

汽車や船の中で、^{バサ}「ご乗客の皆さま」といわれると、移ろいやすいものになった心地

あの汽笛、夜の片隅のありかを告げ

長いアンテナを立てた車、空中に棲む魚を釣りに出かけ

飛行機に乗りこむパラシュート隊員は、空の学校にかよう児童

へとへとの蒸気機関車、駅のベンチに坐つて休もうにも休ませてもらえず、脱線事故を起こしてのけぞり

平野を走る汽車は、突然、みごとなタップダンスを披露する踊り手に早変わり

夜中に耳を澄ますと、おまえをつかまえてやる、おまえをつかまえてやる、おまえをつかまえてやる、とすぎみながら、距離をちぢめようとひた走り、通りすぎてゆく汽車の音が遠く聞こえる

帆船の乗組員、風のハーブ奏者

田園にさびしさの種をまきちらすしか能がない汽笛

サイクリスト、速度をむさぼる吸血鬼

寝静まった駅に停まった列車は、ハンマーで車輪をたたかされると、向こうずねを蹴られたようにかつとなり、眠りからさめる

汽車に乗っていて哀しくなるのは、右の窓は左の窓に絶対になりえないという事実

エレヴェーターのボタンを押しまちがえどきり、借金がある仕立屋につれて行かれそうで

最後の詰めをあやまるな、ボートは岸に近づけば近づくほど、転覆事故を起こしやすし

市電は乗りこんだ夫人をかつさらつてゆく、あとに残された旦那は歩くはめに

市電は卑俗な騒音をまきちらし、選りすぐりの思想を霧散させる

動物

襟もとをはだけ生まれってくる魚、食いしん坊がナイフでお頭を落とすことを予期して居

鳥は年がら年じゅう喪服をまとっている

ゆゆしきことに驢馬は人間にそっくりの歯並びを見せ

蝸牛は日本髪を結っている

夕暮れにそそくさと空を飛んでゆく鳩、一日をしめくくる鍵をたずさえ

亀はそのそ歩きで長寿命

河馬、潜水艦ごっこをして遊び

牡ライオン散髪すれば牝ライオン

闇夜の仔羊、一匹のこらず黒仔羊

うさぎの耳が長いのは、ひとがそこをつかみ鍋に放りこむためかしらん

驢馬のいなく声、田園にひびく、ひなびたサイレン

蛇、風景画に添える花押

猿がひととおなじだとわかるのは、バナナの皮をむくとき

蟬、午睡からさめるときに鳴る、目覚まし時計のベルの音

毛虫もいずれ死ぬ、そう思うとほっとする

もし蟻が地上に住みついた火星人だったら……

世界最大の痛みといえは象の歯痛

こつちをむいて泣く仔羊、パパって呼びかけられているような

グレイハウンド犬、ひもじい思いをした、痩せぎすの男が野うさぎを見つけたように疾走し

鴨は、しつぽを前に、頭をうしろにして、あべこべに飛び

驢馬のいななき、森羅万象の中でいちばん素直な鳴き声

遺跡にゆき、ひそんでいる蠍さそりに往生し

蟻塚、土が痙攣をおこした跡

舌を見せてくれる犬、われわれを医者だと思つて居

驢馬すべてを耳という秤はかりで値踏みし

あまりにもたくさんの鳩、空は百合の花のかたちをした紋章ドに飾られ

クロコダイル、勝手に旅するスーツケース

蛙はしょっちゅう水泳大会に出ている

カナリアは、おのが生まれしてきた卵の黄身を恋しがり

鷺、寸足らずのズボンをはき

うさぎは、ラジオが発明される前からラジオを聴いていた

キザな定義Ⅱ油虫は、言ってみれば、漆黒の闇の色をした黒子ほくろみたいなものさ

比較建築学の素養があるのはつばめのみ

ふくろう、小鳥を食する案山子かかし

魚、団体観光客のように列をなして泳ぎ

爪の手入れをした牝虎、残忍さを加え

魚は始終、横顔プロファイルを見せている

蚊、サキソフオンを鳴らす気配なく安堵する

羊の霊、羊らしく群れを作り、羊雲につつまれながら、天国へ

気どった瞬間、猫がひげを立てるときにおとずれ

ふくろう、森のナイトテーブルにともるランプ

ギターの中に入りこんだ蛙、思うだにぞつとする

羽に火がついた鳩、すなわち戦争

樹のそばにいる蛇、高いところに昇る螺旋階段がつけてあり

ほくにすれば、犬は通りすがりの夢遊病者さ

駝鳥、つけ睫毛まつげをして居

衣ずれのしない虎のコート

蜂鳥、蝶と小鳥の中間種

仔羊の群れの中に、体をびたりと寄せあい、一頭がもう一頭のふわふわした、ぬくもりのある、布団のような毛の上に頭をのせている、仲むつまじい二頭がいる、そうした仕草に、仔羊のやすらぎと、季節によって移動する運命へのあきらめがこめられている

ペルシユ地方〔フランスのバリ盆地西部にある〕産の重挽馬じゅうばんばは、町中を通るとき、競走馬のように、すべてのひとの目を集めていると思つている、人間の虚栄心というやつもそれに似ている

嵐がくる直前、一羽の鳩が闘牛場の警備員のように姿をあらわす、その鳩は、闘牛の囲い場の鍵にそっくりな嵐の鍵をたずさえている

鹿は大自然のシヨウウィンドーに飾られた贈り物

わたくしどもはなぜいつも望遠鏡で、このとりを見るのか

退屈しきつている動物園の動物たちに、テレビ番組を見せる時間を

犬が言葉をしゃべったら、これほど手ごわいおべっかつつかいはいない

テムズ川の魚、川面にうつる街灯のあかりでパイプに火をつけ

麒麟、砂漠のかなたの地平線まで見通す潜望鏡かな

駱駝、いつも砂だらけで虫に食われ

牧場の入口で、羊たちがおどおどした様子で押しあいへしあいしながら入る番を待っている、夕暮れならではの光景
孔雀、現役をしりぞいた神話

仔羊の目、ひとに対してやさしい気持ちをおぼえ

ライオンだつてありがたい気持ちになる、飼い主を胃袋におさめたときに限られるけれど

鏡を見る動物は、映っているのは男友だちか女友だちであり、まちがっても自分だとは思わない、これぞ不条理

矢をつがえて弓を張りきったような状態で、鷲は空から地上の獲物にねらいをつけ

鷗かもめ、波止場でさよならを告げるハンカチから生まれ

クロコダイル、ファラオの時代のトランク

亀がいるおかげで、時間はこれ以上早く進まない

亀は遅れた時計だから、あんなに永く生きていられる

夢遊病の虎は、跳躍して橋を架けながら夢の川をわたる

夜、猫が鳴くのは、猫ではなく人間のこどもに生まれたかかったせいかしらん

サーカスの虎、登場、まるでベッドの下からあらわれたかのようなだ

猫がひとを素晴らしいと思うのは、ひとが暖炉に薪をくべたときだけ

魚は、ひとのかつての姿を映す鏡のように水底できらめく

驢馬、ひとがかぶる麦藁帽子を食し、インテリに

ペンシルヴェニア州発のニュース、アメリカ人のご令嬢が競走馬と結婚されました
狼の遠吠え、野面のづらで耳にするもつとも陰鬱な叫び
シマ馬は飼い慣らされて馬になる前は虎だった

植物

白のカーネーション、いつもまつさらの下着をつけ

薔薇の花、おのれの棘で傷を負い

薔薇は薔薇でも、風ウインドの薔薇の花びらを散らす風はない

柳の枝、ハープよろしく水面をかき鳴らし

茸きのこは地の霊ソウルが棲む世界からやってきた

麦の穂は風のわき下をくすぐっている

蘭、花々の中のプリマドンナ

枝打ちをされる樹木にとって耐えがたいのは、鉦なだに木の柄えがついていることだ

樹木には血管があり、血液が循環しているけれど、心臓は備わっていない、あんなに永く生きていられるのはそのせいだ

動物園に生えているすべての植物、リンネって誰なのと訊き

花は根こそぎにされる罰をうけるにふさわしい

椰子の樹、海と陸のあいだに生える両棲植物

花々はいつもよみがえり、枯れることはない

オレンジの奥底に時計装置が組みこまれ

オリーヴの樹の灰色がかつた葉、ローマ時代の戦車と馬車が立てた埃が積もつて居

自然

曇り空の予報、その日はモノクロ映画のような日和

ひたすら海を眺めていた男の心の中は藻くずでいっぱい

大自然は、瞬時に皮がむけるファスナーつきの果物をまだ生みだしていない

雷が落ちたあと、雷鳴がとどろいても後の祭り

湖、ノアの大洪水が引いたときに残った水たまり

水には記憶というものがない、だから、あんなに澄み切っていられるのだ

大理石は、自分が彫像になるまで何世紀も待つ術^{すべ}を心得ている

砂漠は省略記号、つまり……のふるさと

誰ひとり気づくはずもないが、あれらの雲は裏表が逆だ

雲をさまざまなかたちに変えることができるのはひとり太陽だけ

夏の最後の蝶を見るひとは、その夏、最後のきらめきを目にしている

あぶくの中に考えにならなかつた考えがふくまれ

海が手に負えないのは、あまりにも茫漠として果てしがなく、一匹の魚も、ひとりの遭難者も見えないせい

夏がすぎたと思える頃、蟋蟀こおろぎは波長をあわせ、まだまだと気を入れ直し

冷えこんだ夜、灯台はくしゃみの光を放ち

秋が束になってかかれば、春をやっつけられる

空の表側についた雨はたいてい拭きとられているが、裏側には雨が張りついている

降りつづく雨の音、雨について書かれた長篇小説を読むようにひびき

嵐が去ったあとの雲は、前の雲をお手本にしていなのでほっとする

雨は世界的に水治療法をほどこすものと考えれば、そう迷惑がらずにすむ

潮の満ちひき、浜辺に砂時計があつて時間を厳守し

雲はどこに送られてゆくかを書いたラベルをつけるべきだ、そうすれば安心して眺めていられる

月と砂、狂おしく愛しい

水が幸せな気持ちにひたるのは、馬がひく水車の水受けの中

霧、おしまいにぼろ切れになりはて

雹ひょう、夏の結婚を祝すライスシャワー

遠くの氷、鏡がわれるような音を立て

海綿II波でできた頭蓋骨

凍てつく夜、水たまりの傷はひとつ残らずふさがり

冬の狼（冬將軍）、暖炉の中の燃える森から逃げ出したように、ひとの足許にうづくまり

折にふれカララ大理石の模様の雲がたれこめ

星辰・月

星々はおのれの放つ光に目がくらみ、相手の姿が見えない

天文学者が目を光らせていなかったら、星々は毎日のように位置を変えるにちがいない

流れ星、夜空のストッキングに走る伝線

月がお陽さまになりたがっているような夜

月は断崖が大のお気に入り

月、夜の闇についた汚れを落とす洗濯女

月は地平線のかなたに沈むので、表か裏か、どっちむきに沈むのか知る者はいない

海と冬、星々の輝きにみがきをかけ

星々Ⅱ何世紀にもわたり灯ともつたランプの光

天文学者黙して語らず、金星ヴァイナスをながめたとき、のぞき見をしている男に対するように、あかんべえをしたことを

「月についてまだ指摘されていないことを言えというの。そうだな、月ってというのは、眠れない女がマニキュアをしな
がら眺めるものかもしれない」

鉱物

高品質の金、鉱山ではなく、中国渡来の屏風からとれ

エメラルドの中に隠された秘密とは何か、エメラルドの中は常春ということ

大理石は美しい、何百年も石鹼で洗いつづけたように

音楽

ヴァイオリンの弓、針と糸のように、楽の音とひとの心、ひとの心と楽の音を縫いあわせ

サキソフォン奏者、音楽の豊饒の角をかなでて居

タンバリン、太鼓の家に生まれたネアカ娘

公園の音楽堂、軍隊行進曲のなごりをとどめ

ヴァイオリンは、語りあう男の魂と女の魂という二つの魂をそなえ鼻高々

ギターリスト、救命ボートに早変わりするギターをかかえ憂いなし

ギターの弦、いつも憂愁をたたえた雨だれの音をひびかせ

音楽を聴くと、むかしに帰ってゆく、懐かしい曲を耳にし、過去に舞いもどり、青春の歌にひたる

古代の竖琴^{クラ}が音楽をかなでる頭蓋骨^{クラ}だとしたら、今風の竖琴^{クラ}は骸骨そのものだ

音楽、人生を分不相応に甘やかし

ピアノ店は音楽の葬儀屋さん

クラリネット、音楽の哺乳壺

オーケストラの指揮者がタクトなしで両手を動かしていると、むしろように鉛筆をわたしたくなる

タンゴの歌に別れはつきもの

文学・アルファベット

大文字の D、刃のついていないサーベルの柄つか

嘘を書くつもり作家は、真実を書いてしまうものだ

詩人だけが月時計をもっている

T はアルファベットの金槌ハンマー

俳諧ハイカ、詩趣をたたえた電文

大文字の Y、アルファベットのシャンペングラス

エル・シッド「叙事詩に詠われたスペイン中世の英雄」、殺さなければならぬ連中のことを忘れないように、顎ひげを結び

アルファベットの A はキャンプ用のテントかな

ラ・ブリユイエール「十七世紀フランスのモラリスト」の泣きどころ、似たような名前のチーズがあり

暗喩メタファーはコーヒーに角砂糖をいれるときに思い浮かぶ、角砂糖がラム酒にひたしてあれば、効果てきめん

読者は、女と同様、まんまと一杯食わされた作家ほど深く愛する

こすつからい批評家とは、本を後ろから読む能力をそなえた輩やからのことなり

ドン・ファン、求職者のように恋をあさり

筆の立つ作家、おのれに文才があるかどうか、ろくに知りもせず

S はアルファベットの釣り鉤ばり

ダンテ、すなわち生きた月桂樹の灌木

アルファベットの X はコルセット

華麗にかざられた文章Ⅱ蜂鳥は勿忘草わすれなぐさをついばむ〔伊達男はご婦人に言い寄る〕の意〕

芸術

彫像を見れば、いま生きている時代がどんな時代かわかる

絵画にも雪どけがあるとしたら、雪景色ほど哀れなものはない

寓意をふくんだ作品、庭園に建てられた彫像のごとし

モナリザ、時の流れを小ばかにしたような笑みをふくみ

舞踊家になるとは、顔色ひとつ変えず、舞台という脚光をあびる冷水に飛びこむこと

ロダンの『考えるひと』、つぎの一手を考えるうちに、チェス盤を片づけられ

絵画を展示する大美術館だけが生命を宿し、そのほかすべての美術館は死を宿している
かけ出しの頃、どんな画家も水彩画家の道に手を染め

夢

夢とは、失くしたものが詰まっている納戸である

夢とは何か、空想が洩らす溜め息

夢は最近見られるようになったのか、それとも昔から見られていたのか

夢の中には、われわれの友だちではない、友だちの友だちが登場する

政治・思想

社会主義者とは、おのれが社会主義者だということしか分かっていない連中のことだ

時間には重さがない、もし重さがあつたら、人間はひとり残らず押しつぶされてしまうから

哲学者、自然界にあるものはすべて難問だと思っている疑りぶかい種族

靈魂、洗濯する日がきた下着のように肉体から離れ

論理とは理性入りのスプレーである

悪は絶え間なく活動をつづけ、善はときとしてふて寝をし

巨大な投光器、神の所在を探して居

実存主義というのはけつきよく、実存にかかわる諸問題を解決してくれない

三日月が空にかかっているのを目にした共産主義者は、ずうずうしくこう呟く「これはどうしたことが。ハンマーが

欠けているじゃないか」

ぼくの理想はますますつましいものになってゆく、今日は机の脚を切ってしまった

神話・歴史

どんなヴィーナスも後ろから見れば瓜ふたつ

天使はパラシュートを使うのかしらん

スフィンクスは目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えない

パストゥール、シルクハットから白うさぎを取りだす手品師

歴史、これからも人類に過ちを犯させることになる尤もらしい口実

中世騎士による馬上の槍試合||ピカドール〔闘牛で馬上から槍で牛の背をつき刺激する役目をになう〕が二人、闘牛はなし

歴史の見上げた点はくり返すことだ、歴史がでっち上げられれば、そのたびに出来が悪くなるから

もはや裸一貫では生きていけない以上、預言者は存在しない

森ニンフの精と海セイレーンの精のちがいが、森の精のキスがさりとした味なのに、海の精のキスはしょっぱい

処女林というものは存在しない、処女林こそサテュロス〔半人半獣の森の神〕が徘徊する場所なのだ

古代エジプトの方尖塔オベリスク、いわばやせ細ったピラミッド

神の教えでは、くしゃみは三回することになっているが、そのわけはまだ医学では解明されていない

スフィンクス、科しなをつくりながら、あらわれ出た蜃気楼の鏡をのぞきこみ

そのほか

こぶしを握りしめ、胸の中でボクシングをする心臓

輸血とは、Bのぐうたらな心をCの体に移すこと

花びらのようなキスの跡

学者が血眼になって探している「失われた環かん」〔現生生物としても化石としても発見されていない仮想存在の生物〕は、きっとマ

ドリードの蚤ラストロの市ラストロにあるにちがいない

心臓は愛のアーティチョーク（朝鮮あざみ）

イギリスの土曜日は、日曜日に月曜日を接ぎ木したものだ

イスラム国の君主は頭痛予防のためにターバンを巻き

原子とは何かと訊かれ、発火しないマッチに欠けているものと答え

山のように疑問があるのか、山のように借金があるのか、いったいどっちなのか

心理学者||人間の精神にふれるヴァイオリニスト

過去とは、やぶれ太鼓がところ狭しと詰まっている物置

思いついたことには金の指輪をはめておけ、そうすれば、おのれのものになるはずだ

野望の厄介な点は、何がやりたいのかはつきりしないこと

長生きとは、最後にやってくる集金人を待たせる術を心得ていること

破産とは、銀行家が壊れた肘かけ椅子からすべり落ちることなり

平方六面体という言葉を口にするひと、舌がもつれ

〔付記〕

本稿は、「スペイン・フランス・ラテンアメリカの前衛派の文学の比較研究」という共通テーマのもと、平成十四年度の
関西大学学部共同研究費を受けた成果の一部として公表するものです。

A Japanese Translation of Selected 'Greguerías' by Ramón Gómez de la Serna

Wataru Hirata

Daigaku Horiguchi (1892-1981), a poet and translator, had a strong interest in the Spanish literature besides his specialty of French literature. It was he who introduced Ramón Gómez de la Serna (1888-1963), a Spanish avant-garde writer in the early 20th century, to Japan before anyone else did. He translated his 'Senos' (1917), a collection of erotic short stories, into three parts, 'Miscellaneous Thoughts on Breasts' (1969), 'Selections from Breasts' (1979), and 'New Selections from Breasts' (1980).

Another important work of Ramón, 'Greguerías', was also published in the same year as 'Senos'. Influenced by the Avant Garde movement surging in Europe, he aimed at the reform of the old traditional literature, and defined it as 'humor + metaphor'.

'Greguerías' is often talked about as similar to Jules Renard's well-known 'Histoires naturelles'. But there are big differences between the two even in the objects of study. Renard's work is titled as Natural histories, but it mostly deals with animals to the extent that it could be titled as histories of animals. On the other hand, a significant portion of 'Greguerías' also deals with animals, but it mainly deals with still life.

In 'Greguerías', the works dealing with still life draw our attention because they show his love of still life in the daily life. He paid attention to the trifles that poets had not, and expressed them in 'Greguerías'. As a result, the sphere of poems was expanded. After 'Greguerías', the importance of metaphor was reevaluated in Spanish poems, and it should be recognized as one of Ramón's achievements.